

平成28年度第16回講演会 記録

日 時	平成28年12月10日(土)
会 場	此花会館梅香殿
講 師	和歌山県立自然博物館 学芸員 揖 善継 先生
演 題	ニホンウナギと日本人の暮らし
備 考	参加者数168名(会員146名、一般14名、公開聴講8名) 記録 藤原

揖 善継先生は学生時代から今日まで、ウナギの研究を続けてきておられますが、単に生物学的な範疇に留まらず、ウナギに関連した歴史、文学、民俗学などにも造詣が深く、今回の講演ではウナギに関わる諸々のお話を総合的に、「ニホンウナギと日本人の暮らし」と題して講演(要点下記)していただきました。



1. ウナギと人のかかわり

貝塚からウナギの骨が発掘されることから、大昔より食されていたことが分かる。万葉集にも2首登場し、すでに滋養強壮に良いとされている。江戸時代、盛り場には鰻屋が開店していた。“ウナギ”の語源はムナギ(胸が黄色)? 日本やフランス、スペイン、イタリア等のウナギ料理、ウナギが出てくる小説や映画のことなど、多方面にわたるウナギと人のかかわりに関する事例がたくさん紹介された。

2. 絶滅危惧のウナギ

ヨーロッパでも日本でも、30年前の百分の一に漁獲量が激減。ヨーロッパでは2008年に、日本では2013年にレッドリストに掲載された(日本は絶滅危惧IB類)。生態が良く分からないことから、漁獲制限数を決め難い、各国各々の取り組みでなく、東南アジア全体で守らなくてはならない等の問題がある。減少要因には、短期的要因(産卵時期のズレ他)、中期的要因、長期的要因(地球、海洋環境変化)があるが、人が関与できるのは中期的要因の解消で、過度の捕獲をしない、生息場所の減少劣化を防ぐことである。

3. ウナギってどんな魚

ウナギの仲間は世界中で19種、太平洋には14種、日本には3種(ニホンウナギ、オオウナギ、ニューギニアウナギ)が生息。

4. オオウナギ

日本の淡水魚で最も長い魚(2m, 20kg)。生息数が減っており、各地で保護の対象になっている。天然記念物指定は3件。

5. ウナギの暮らしぶり

謎の多い生態。海で生まれ川で育つ降洋型回遊魚で、サケ等の遡洋型回遊魚と違い地域性が無い。産卵場所が不明であったが、大西洋ではサルガッソ湾でデンマークのヨハネス・シュミットが1992年に発見、太平洋でも2009年に発見された。3,000Km, 半年間の旅をして、日本の川にたどりつくことが判明した。養殖ウナギは天然のシラスウナギを捕えて育てたもので、完全養殖のものが食卓に上るのはもう少し先か?

6. 保全

保全のためには、東アジア全体で取り組む、国内では省庁間の垣根を超える、完全な生態の把握等の問題の解消が必要。人間活動と保全活動の調整が、人と他の生き物が共生できる環境の保全が求められる。

【田中先生談話】

ウナギの問題は、日本の周辺の水辺の生き物に共通の問題である。生き物が百分の一オーダーで減少しており、川も海も同じ問題を抱えている。先日、豊岡のコウノトリを観たが、コウノトリの復活のケースと同じであり、子供たちが安心して暮らせる環境と経済活動が共に成り立つようにしていかなければいけない。